

# 同志社とハワイ

——戦前の交流の軌跡をたずねて——

竹 中 正 夫

## はじめに

1985年2月、官約移民百年の記念行事の一つとして、ハワイの日系人の宣教百年の記念の集會に招かれホノルルをたずねた。ヌアヌ組合教会の清水昭氏（同志社大学神学部昭和25年卒）のはからいで、到着した夜に同志社の関係者の歓迎会がもたれ、ハワイにおける校友・同窓の方々との歓談のときをもった。それから数日して、ハワイ大学図書館東洋図書館長の松井正人氏をおたずねした。同氏は、1953年に同志社大学法学部を卒業し、大学図書館に勤務し、シラキュース大学やミシガン大学で図書館学を修め、ハーバード大学やワシントン大学の東洋図書館で仕事をしたのち、1975年にはハワイ大学で博士号を取得し、1983年には、「薩摩藩主、島津重豪」に関する資料調査、研究によって、W. ウイルソン最高功労章をうけた人である。図書館学を学んで同志社に帰る予定であったが、諸種の事情でそれを果し得なかったとき、当時の大塚節治総長から「どこにあっても同志社の精神をもって働くように」ということばをおくられて励まされたという。ハワイ大学で教鞭をとった元同志社総長原田助のことなどをうかがったのちに、同氏の案内で篠田稔教授をおたずねした。篠田教授は1984年に引退されたが、長い間ハワイ大学で日本歴史を講義するとともに、ハワイ大学に設置されている東西研究所（East-West Center）で重要な働きをつとめるなど東洋研究の促進に尽力された学者である。彼は、1938年から39年にかけて、同志社のスチューデント・フェローとして、ハワイ寮に住んで日本

研究に励んだ。篠田教授は、そのころをふりかえって、自分の日本研究が同志社に負うところが少なくないとのべておられたが、当時ハワイ寮の臨時ディレクターをされていた上野直蔵氏のことを懐しく回想しておられた。『同志社百年史』をみると、上野直蔵先生は当時文学部助教授で、1938年8月から翌1939年8月まで前任者が学生と対立して辞任したあとをうけて一時空席となったハワイ寮の責任者として、学生たちと起居を共にして、寮生活の建て直しに励んでいたことが記されている。<sup>1</sup>同志社とハワイとの関係を知る一つの手がかりを、具体的に見るおもいがした。このようなきっかけから本論においては、第二次大戦までの同志社とハワイとの交流をふりかえってみることにした。今後の研究と交流の一助となれば幸いである。

## 同志社からハワイに

ハワイの教会が1985年にハワイにおける日本人伝道の百年祭を祝った根拠は1885(明治18)年2月8日に944人の第1回の官約移民を乗せて、ホノルルに到着したシティ・オブ・トーキョウ号に青木真一という同志社の神学生が乗っており、彼の働きがハワイにおける日本人伝道の出発となったといわれているからである。同志社に存在する記録からは、青木真一について詳にされるに到っていない。ハワイ側の資料によると、1884年9月にハワイの伝道会社、(1863年成立、The Board of the Hawaiian Evangelical Mission)の主事 C. M. ハイド(Charles McEwen

1. 『同志社百年史』通史編二、1030頁

Hyde) は、官約移民がハワイに大挙来ることを察知し、前年の1884年9月にハワイの駐日理事官であった R. アーウィン (Robert Irwin) に手紙を書いて、日本からキリスト教の伝道にあたる人物をおくる様に依頼した。<sup>2</sup> それにこたえて、当時同志社の神学生であった青木真一が、移住事務局特派委員であったアーウィンと共に、トラクトや聖書の分冊などをもって来日したといわれている。

官約移民50周年の記念誌には、1885年2月8日にホノルルに到着したシティ・オブ・トーキョー号の移民者名簿が出ているがその中に青木真一という名は見あたらない。<sup>3</sup> その第93番に青木健次郎という名があるが、同一人とは考えられない。あるいは青木真一は移民ではなく他の項目で来布したのかも知れない。ただ、木原隆吉編著による『布哇日本人史』によると、ハワイの日本人伝道は、1886年にハワイ伝道会社のハイドの働きによるとしながらも、「一説には明治18 (1885) 年2月8日所謂官約第一回移民が到着した当日ハイド博士は礼拝を催し、第一回船で来布した神学生青木某の通詞で説教をしたと云ふ。青木某は1887年渡米したが、青木の渡米後、安藤総領事並に子息、領事館員がハイド博士の通詞となって伝道を助けたと云ふ<sup>4</sup>と附記されている。この神学生青木某があるいは、青木真一であるのかも知れない。この点についてはさらに今後検討を要することである。

日本人の移民の大部分は、3年の契約で砂糖黍畑で働くものであった。彼らは、所定の給与(一ヶ月男6ドル、女4ドル)の夕食費の給付をうけ、1日10時間、一ヶ月26日間労働すると

いう契約であった。第二回の移民船の山城丸が同年6月にホノルルに来たのにつづいて、日本人移民が相ついで到着した。かれらは当初の契約年数を延長したり、再渡航するものもあり、先世紀末には、ハワイにおける日本人は、約3万5千人に及び、ハワイの総人口の1/4を占めるに至った。<sup>5</sup> 彼らの大半は砂糖黍畑で働く労働者で、その中の約4/5は30歳以下の若者で、1/5は女性であり、風俗や習慣のちがう異郷の中であって多くの問題をかかえていた。これらの日本人移民労働者に伝道を開始したのは、前記のハワイ伝道会社のハイド主事で、2月8日が日曜であったので、ハイドは一行を迎えて有志のものと共に最初のキリスト教の集会をもった。ひきつづいてホノルルのキリスト教青年会が部屋を提供し毎日曜の午後に日本語によるキリスト教の集会がもたれ、青木真一が説教し、ハイド夫妻も出席して集会を助けたと伝えられている。<sup>6</sup>

先述のハワイ側の資料によると青木真一は二年ほど滞在し、米国本土に勉学のために赴いた。そのあと、1887 (明治20) 年9月より米国サンフランシスコのメソジスト教会の派遣により美山貫一がハワイ伝道にあたり、ハワイ伝道会社もこれを助けた。ところが1891年9月カルフォルニア州のメソジスト教会の年会の決議によってメソジスト教会のハワイ伝道は中断され、ハワイ伝道会社がこれを引きつぐことになり、たまたまハワイ島ヒロで伝道をしていた組合派の岡部次郎を招いて伝道にあたらしめた。<sup>7</sup> 岡部次郎については、従来から、ハワイ日本人移民史刊行会による『ハワイ島日本人移民史』(第三部半世紀前の日系移民—先駆者・岡部次郎氏のことなど—) によって、1864年9月に生まれ、1885年農商務少書記官高橋是清に従ってアメリ

2. Mary I. Kuramoto, "Hundred Years of Japanese Christians in [Hawaii and the Nunanu Congregational Church]", *The Centennial Bulletin*, February, 1985. *Pacific Commercial Advertiser*, February 13, 1885.

3. 『官約日本移民布哇渡航五十年記念誌』日布時事社発行, 1935年。

4. 米原隆吉編著, 『布哇日本人史』文成社, 昭和10年, 215頁。

5. O. H. Gulick, "Work for Japanese in Hawaii", *A Chapter of Mission History in Modern Japan*, Compiled by James H. Pettee, Okayama, 1895. p. 76.

6. Mary I. Kuramoto, *ibid.*

7. 美山貫一のハワイ伝道については吉田亮「移民社会とキリスト教—美山貫一のハワイ日本人移民伝道」『キリスト教社会問題研究』第31号参照。

カに渡って、1888（明治21）年オベリン大学を卒業したのち、ハワイに赴いたとされているが、杉井六郎氏の辻密太郎の生涯の研究によると、1889（明治22）年春オークランドで横井時雄とあったのち人為的な神学校に入って、職業的教授に学ぶのではなく、生きたハワイの神学校で実地の伝道から具体的な神学を学んだことが明らかにされている。<sup>8</sup>

岡部次郎は、ハワイの日本人伝道にあたる同労者を募るため1891（明治24）年末に帰国し、翌明治25年3月に開かれた第7回組合教会総会に出席し、懇談会で、「ハワイ国の伝道師の為に経験を得るに良き所」とのべハワイ伝道の話をしている。これは、自らの体験に基づいてハワイに青年伝道者をおくるようにというアピールをしたものと思う。事実彼は、少なくとも三人の伝道師が必要であり、30ドルの月給を支払い、自分の代りになる人には45ドルの月給を払うので神学校を卒業した者を送るような具体的な条件をもって提案をしていた。<sup>9</sup>

のちにハワイ伝道に生涯を献げた奥村多喜衛の『恩寵七十年』によると、1892（明治25）年、同志社神学校に在学中、彼はハワイから来た岡部次郎のハワイ行きをすすめる演説をきき、「少からず心を動かした」<sup>10</sup>とあり、岡部次郎のアピールにこたえて同志社から相ついでハワイにわたるようになった。こうして1893（明治26）年末までにハワイの日本人伝道に従事した同志社人として、奥亀太郎、江上源三、高森（城）貞太郎、神田重英、江口一民（奥村禎次郎）、山崎直らの名がたどられる。<sup>11</sup>なお、この期間に、いち早く岡部次郎をたすけた二人の人物があった。一人は星名謙一郎であり、もう一

人は峯岸繁太郎であった。二人は直接同志社の卒業生ではなかったが、星名はのちに同志社とかかわりをもった。すなわち星名謙一郎とハワイで結婚した末光ヒサは同志社で学び、のち松山女学校で教えたが、1913年より同志社に來り、同志社女子専門学校で教鞭をとると共に、1948年12月永眠の日までミス・デントン（Mary F. Denton）の世話をした。またその息子星名泰は大学長（1966～1968）をつとめ、さらに同志社中学長（1923～31）、のちに高女部長・教頭（1931～45）、高等女学校、女子中・高校長（1945～51）をつとめた末光信三はヒサの弟であった。峯岸繁太郎は、1891年6月19日にホノルルに到着し、ハワイ島ヒロに赴き岡部の伝道をたすけた。

岡部次郎のアピールをうけた同志社の第二陣ともいべき人びとは、1894（明治27）年に相ついでハワイに到着し、伝道にあたっている。のちにマキキ教会を設立した、奥村多喜衛、終生ホノムにとどまって地味な伝道と教育にあたった曾我部四郎や江上源三と普通部で同級であった佐々倉代七郎などがハワイに赴いたのみでなく、霊南坂教会牧師であった綱島佳吉も、同年二月横浜を出帆して6ヶ月間ハワイを問安しその様子を日本に報告している。

先述の奥村多喜衛は同志社で学んでいたころ属していた鶴鳴会という団体についてつぎのようにのべている。<sup>12</sup>

余が同志社在学の頃京都に信者の小さい団体があつた。鶴鳴会と称へ少々風変りな仲間の寄合で、先づ指を折れば南禅寺の珍客と綽名され、年一度しか髪と髭とを切らぬと云ふ岩村秀太郎君。筒袖に短い袴、片々の尻切れ草履で大道を濶歩する丸山伝太郎君。佐々倉代七郎君。中村伊津吉と其妹。余と神学校に同級の柚田弥三郎君外に二三の男女が数へられた。其の一員に加へられた余も確に一変人であつたと見える、而も此寄合から信仰上得

8. 杉井六郎、『遊行する牧者—辻密太郎』、教文館、1985年267—276頁。

9. 同上、277頁。

10. 奥村多喜衛『恩寵七十年』1935年12頁。

11. 飯田耕二郎、「同志社出身の初期ハワイ伝道者に関する記録」、同志社女子中・高等学校年報『薨』第15号（昭和59年9月）、奥村多喜衛、『布哇伝道三十年畧史』1917年ならびに杉井六郎 前掲書 302—303頁。

12. 奥村多喜衛『恩寵七十年』114—115頁。

た所は頗る多大であった。

ここであげられている人びとの多くは、四條教会（のちの京都教会）に関係し、またハワイ伝道に参加したことは注目すべきことである。奥村多喜衛は大阪教会の会員であったが、1893年夏には四條教会の夏期伝道師をつとめている。佐々倉代七郎は江上源三と同志社普通学校で同級で1894年に夫人とともにハワイに渡りハワイ島パパイコウの伝道にあたった。岩村秀太郎と中村伊津吉はともに四條教会の会員で、中村は1898年ハワイに赴いたが、その出立を前にして、同年10月14日四條教会は送別会を催している。岩村秀太郎は、明治18年1月14日四條教会設立のとき受洗入会した人で、1898年ハワイに渡り、同年12月17日ホノム日本人教会に転会している。柚田弥三郎は丹波の出身でハワイに行かなかったが四條教会に属していた同志社の神学生で、長浜の伝道にあたって30歳の若さで逝去した人で、奥村多喜衛の親友の一人であった。<sup>13</sup> 1894年ホノムに渡り、終生ホノムに留り教会ならびにホノム義塾の運営にあたり、ホノムの聖徒といわれた曾我部四郎は、上述の鶴鳴会に入っていたかは明確でないが、福岡県に生まれ、今治で育ち、1888年より京都に來り、同志社で神学を学び、その間四條教会の会員であった。<sup>14</sup> 四條教会は、彼らがハワイに赴いたのちにも、その会員名簿の中に他教会員として記していた。ハワイにおける彼らの働きを祈りの中に憶えていたように思われる。<sup>15</sup> なお、1894年4月、O. H. ギューリックがハワイに歸來したことをつけ加えておく。彼は約20年間日本で伝道したのちハワイに來り、ハワイ伝道会社の日本人伝道部の部長として有力な働きをした。

奥村多喜衛は、1894（明治27）年ハワイに着き、岡部次郎を助けて、ヌアヌ教会で働き、岡部が去ったのち、牧師となり、教会の独立をは

かり、名前も「日本人独立教会」と改め、教勢を進展させた。しかし、1902年に小崎弘道が來布し、同じ熊本出身の大久保真次郎を同教会の牧師に推したので、奥村はマキキ地方に開拓を試み、1904年に教会を設立し、1937年引退するまで有力な働きをなした。とくに、1932年には高知城をかたどって城の型をした新会堂を建築したり、日本語教育や矯風運動に力を注ぐなど顕著な働きをした。彼は、日本人がハワイにおいて、人数は可成り多いが、まともな生活を堅実に営むものが少なく、遊飲坐食し、日本の陸海軍の威を借りて、威張りちらし多くの人びとから批判されている姿に胸を痛めていた。<sup>16</sup> 彼は、ハワイではじめて日本語教科書を作製したとき、「忠君愛国」の四字を削り、かつ、「教育勅語」を取り除いた。そのために彼は「謀反人である、幸徳秋水であると攻撃された」<sup>17</sup> ことがあった。彼は、日本人がハワイにおいて人間として受けいれられ、尊敬される人格を養い、日本の国益のために働くのではなく、ハワイの社会の発展のために現地の人びととともに尽力すべきことを主張してやまなかった。「我等は日本人であるから何処までも大和魂で突進さねばならぬ」という人びとに対して「我等は努めてアメリカに同化し、我等の子女は善良なる米国民市民に仕立てあぐべし」と主張して、日米間の問題を解決するように努力した。<sup>18</sup>

曾我部四郎については、中野次郎氏によって綿密な研究がなされハワイ日本人伝道百年を記念して合同教会のハワイ協議会から伝記が出版されているのでここに多くを述べることを控えるが、幾多の困苦にも拘らず、またたびたび他の有力教会の招きに耳を傾けずに、ホノムの地に留ってホノム義塾による人間の育成と小さなキリスト者の群（明治31年会員19名）を牧して、1942年に引退し、1949年7月3日、85歳で永眠するまで、57年間ホノムの地に留り、多くの教え子たちや信徒たちから「ホノムの聖徒」と仰

13. 『京都教会百年史』1985年 115—120頁。

14. 『四條教会戸籍巻』

15. 『京都教会百年史』232頁。

16. 杉井六郎前掲書、298—299頁。

17. 奥村多喜衛『信仰五十年』昭和13年 23頁。

18. 奥村多喜衛、『ハワイに於ける日米問題解決運動』1925。

がれたことを記しておく。<sup>19</sup> 現在ホノムは人口500人ほどの小さな村にすぎない。かつては1,000人を越える労働者が砂糖黍農場で働き、約3,000人の人びとがひしめいていた町の活気を伝える面影はない。廃虚となったホノム義塾の調理場の爐の煉瓦につぎのようなことばがきざまれている。<sup>20</sup>

IN MEMORY  
REV. SHIRO SOKABE  
MISSIONARY AND TEACHER  
1894-1949

明治期にハワイ伝道に尽力した同志社人として忘れてはならないのは辻密太郎(1860—1945)である。彼については、近年、杉井六郎氏によって、詳細な評伝<sup>21</sup>が出版されたのでそれに譲り、二、三の点を付記するにとどめる。曾我部四郎の場合もそうであったが、辻も従来から組合教会の主流から忘れられた人であった。今回の杉井氏の評伝は、辻がしたためた未完の『自傳』に出発しながら、日本組合教会関係資料ならびにアメリカおよびハワイ所在の関係記録を縦横に駆使して辻密太郎の行蔵を逐ったもので、単なる一人の牧者についての伝記にとどまらず、日本組合教会の地方・底流の消息や海外にあって人知れず伝道にあたった人びとの辛苦の姿を原資料に照して浮き彫りにした業績として高く評価されるものであろう。辻密太郎は播州加西郡中富に生まれ、大阪に出て沢山保羅の感化をうけて、同志社に学び(1881—1885)、熊本、島之内、上州筑後大牟田などで伝道・牧会に励んだのち、1898(明治31)年よりハワイ

にわたり、最初マウイ島パイア耕地で七年、ついで1905年からカワイ島リエフ耕地に移った。リエフで先任者が去ったのちその留守を守り、辻を迎えて共に働いたのが内田堯であった。彼は、1903(明治36)年同志社普通学校を卒業し、平信徒として日曜学校や日本語学校で働き1906年シアトルにわたり、晩年はオークランドの家庭に多くの同志社人を迎えてねんごろにもてなした。辻密太郎は1922(大正11)年春に内田家の客となり、そのゲスト・ブックに「岩石も徹かして一筋に射る矢にこむる丈夫の意地」と新島襄の和歌を記している。17年前の旧友をあたためた二人の交流のあとをかいまみるおもしろいとする。

ハワイの日本人教会の中でも有力な教会であるホノルルのヌアヌ組合教会の歴代牧師を辿ると、初代の岡部次郎のあと先述の奥村多喜衛(1894—1902)、大久保真次郎(1902—1905)、宮森武次郎(1905)、山口金作(1906—1907)、宮森武次郎(1907—1908)、<sup>22</sup>堀貞一(1909—1927)、田村清(1928—1937)、後藤政一(1931—1957)という名が列挙される。<sup>23</sup>

最後の田村清と後藤政一を除くと、他のすべては同志社で学んだ人びとである。田村と後藤は同志社の卒業生でなかったが、田村の妻すなおは、先述の辻密太郎の息女であり、後藤政一はのちにのべるように、1937年から1939年にかけてフレンド平和奨学金によるフェローとして同志社で教鞭をとるとともに日本文化を学ぶときをもった。

さきにも触れたように、ハワイに来た日本人移民の多くは独身の男性であり、婦人が少数であったため、当初からさまざまな問題がおきた。また、その後、日本から来たいわゆる「よびよせ夫人」が多く来布し、それらの婦人たちの間で働きをなす必要がおこり、宋栄子や富森幽香が尽力している。宋栄子(1865—1932)

19. Jiro Nakano, *Samurai Missionary, The Reverend Shiro Sokabe*, Hawaiian Conference of the United Church of Christ, 1984. 中野次郎, 『ホノム義塾 曾我部四郎伝』1985年。

20. なお曾我部四郎と妻しかの墓はヒロのホームラニ墓地(Homelani Cemetery)にあり、表には二人の名と生年と没年がそれぞれ記されている。四郎のものには1865—1949とあるが、これは1867の誤りである。裏面には、「一切をすてて主に従へり」、(ルカによる福音書5章11節)が英語と日本語で記されている。

21. 杉井六郎『辻密太郎の生涯—遊行する牧者』教文館, 1985年。

22. 宮森武次郎は同志社神学校別科を明治34年に卒業している。

23. 塚本彰夫編『ザ・パラダイス』, ハワイ日系キリスト教会連盟, 1976年, 48頁。

については吉田亮氏の紹介があるのでそれに譲るが、ハワイ伝道会社の日本人部長の斡旋で、1895年にハワイに来て、日本人婦人ホームやヌアヌ幼年寄宿舎などの働きを通して重荷を負った婦人たちや子供たちのために尽力した。<sup>24</sup>

富森幽香（1865—1945）は、水口の出身で、1887年平安教会で受洗し、1901年夫篤とともにハワイに渡り、ホノルルのメソジスト教会の婦人伝道師をつとめると共に、婦人ホームの働きを担当して、婦人たちの育成につくし、1904年主人を病で失ってからは、同志社の女子教育に尽力した。同志社大学神学部の教授であった富森京次はその息子である。

これらの人びとの外にも、ハナペペに1897年から1900年にかけて伝道した茂原茂（同志社神学科別科明治25年卒）、コハラで1903年から1907年まで働いた鷺山誠晴（同志社神学科別科明治24年卒）1904年からプウネネで働き、1906年からハワイ島のヒロのホーリクロス教会牧師を約20年間つとめた樋口貫（同志社神学校別科明治29年卒）、カカアコで1905年から1912年にかけて伝道にあたった上代知新やオーラーで1915年から牧会に励んだ小北皎次郎も、同志社の交わりの中からハワイに赴いた合びとであった。戦後同志社につながる教会の交わりの中からのちのハワイ伝道に赴いた人びととして、重松征太郎、牧野虎次、畠中博、原忠雄、塚本彰夫、清水昭などの人びとがあげられるが、本稿は主として戦前を扱うこととするので割愛することとする。

今後ハワイにおける日本人移民とキリスト教の研究が進むにつれてこれらの人びとの働きが浮き彫りにされてゆくにちがいない。

ハワイ伝道にあづかったこれらの同志社人たちは、個性豊かな人びとで、それぞれの賜物を生かして、それぞれの特色を発揮して伝道に励んだ。たとえば、奥村多喜衛は城にかたどった壮麗な教会堂をホノルルの中心部に建て、日本人移民の同化に指導的な役割を果たした。それに

ひきかえ、曾我部四郎は、コツコツとホノムの地であって50数年を子供たちの育成に励んでホノムの地に没していった。一方があでやかな牡丹とするなら、他方は地道な野菊のようなものであった。そういう点からいうと辻密太郎は、前二者ともちがって、荒地のようなところでも出むいて行って、根をおろすたんぼぼのような開拓的な牧師であった。彼らがそれぞれのちがった賜物を生かして協力しあったところに同志社的特色があったということが出来よう。

さらに、これらの人びとの多くは日本組合教会の地方伝道にあたった人びとで、いわゆる熊本バンドの人びとを中心とした同志社英学校の第一回の卒業生たちの流れとはちがったサークルにあった人びとであったことが推察される。彼らの渡布の動機にはいろいろ複雑なものがあったに違いない。しかし、そのなかには、困難な地方伝道にあたった者たちが少なくなかった。彼らには、熊本バンドの指導者たちによって占められていた大教会の牧師たちには充分わかって貰えない悩みやねがいがあったにちがいない。ハワイ伝道に尽力した、奥亀太郎、堀貞一、原田助、綱島佳吉、辻密太郎は、みな同志社英学校第一回の卒業生のつぎのクラスの人びとであった。またハワイには赴かなかったが四條教会の初代（仮）牧師となった井手義久は地方伝道の辛酸をなめた人であり、辻密太郎や堀貞一ときわめて親しかった。そうした交わりの中から茂原茂や奥村多喜衛、そして曾我部四郎、樋口貫というよう人びとが輩出されていったように思われる。これらの組合教会の底流にあった人脈を検索することは、ハワイにおける日本人伝道史においても大切な課題であり、それはとりもなおさず日本組合教会の歴史を解明する点においてもきわめて重要な視点を提供するのではないかと思う。

#### ハワイから同志社に

1911（明治44）年2月、ハワイの平和主義者セオドル・リチャーズ（Theodore Richards）は日本を訪ね、フレンド平和奨学金（Friend

24. 吉田亮「ハワイ移民の母・宋栄子の生涯と信仰」『基督教世界』第3420号（1985年5月10日）

Peace Scholarships) の設置を識者に提案した。その趣旨は、日米両国の親善をはかるため、すぐれた学生を選んで米国に送って研鑽の機会を与えて、両国の友好に寄与する人材の育成をはかるというものであった。その熱意にこたえて、日本側では、大隈重信を委員長として、成瀬仁藏が会計、元田作之進が書記、新渡戸稲造が選考を担当し、小松原慶太郎、神田乃武、井深梶之助、江原素六、菊地大麓、澁沢栄一、鎌田栄吉、尾崎行雄、島田三郎、海老名弾正、森村市左衛門、本多庸一、原田助らが委員をつとめ、この奨学制度を発足させた。その内容は、往復旅費の他に、当時の金額で3,000ドル(6,000円)を支給し、ハワイまたは米国本土の大学で四年間研鑽の機会を与えるものであった。<sup>25</sup>

1911年といえば、日本人移民の土地所有を禁じた排日移民法案が設定される二年前で、日米両国の間に誤解や相剋がおりつつあった時代であったことを想起すると、この奨学金制度を提案したリチャーズの見識に打たれるものがある。

第1回の奨学生の一は、のちにジュネーブのILO(国際労働機構)で有力な働きをした鮎沢巖であった。もう一人は柏木隼雄で、彼はオベリン神学校やイエール大学で学び1923年に帰国して原市教会牧師となり、父柏木義円のあとをついで上州伝道に尽力した。

1927年ごろからフレンド平和奨学金はハワイ出身の日系二世の青年たちを日本に送り研鑽の機会を与える必要を認め、従来の制度を変更する様に検討していた。そのころたまたま、同志社大学では、総長就任いらい国際主義の教育に力を入れていた海老名弾正の下に、同志社独自の国際交流計画を立案していた。その要項にはつぎのように記されていた。<sup>26</sup>

「同志社大学は、同志社の英語教育を発展させ、かつアメリカおよびハワイの二世に日本語と日本文化を研鑽させるため、『英語ス

チューデント・プロフェッサー』(A Chair of Student Professorship of English)を提供する」

この計画は、米国からの学生には、同志社の英語教育に貢献してもらうとともに、彼らに日本文化を研修する機会を提供しようというねらいで、いわば、一挙両得を考えた、きわめて注目すべき案であった。資格としては、キリスト教会の会員であり、同志社の認める大学出身者で、英語を教授する能力があることなどがあげられ、義務としては、同志社に属する学部、学校で週15時間以内英語教育にあたることが定められ、任期は三年で、年俸1200円と渡航費および居室を提供し、同志社大学のほか、京都帝国大学等他大学で聴講することが出来るようにはかられていた。この計画はきわめて意欲的なもので、初年度は5名程度、数年後には少なくとも毎年15名をスチューデント・プロフェッサーとして招きたいという構想であった。この計画においてとくに注目すべきことは、日米間の摩擦が増大していたときに、アメリカにおける日系二世青年に教育の機会を提供し、日本の文化を深く知る経験を与え、日米両国の相互理解を促進する人材の養成を目ざすという点であった。1927年大下角一とともに最初のスチューデント・プロフェッサーとして同志社にきた後藤順の父に送った海老名弾正の書簡は、その趣旨を明確に伝えている。

「二世が適切な訓育を受けられれば、彼らは100パーセントアメリカ人になることができるだけでなく、日米両国を繋ぐ貴重な役割を果たすことができ、ひいては、これによって人種問題の解決と世界平和に貢献するであろう。(中略)このためには、とくに二世の指導者となる者が、アメリカにおける教育のみならず、日本の学芸と文化とを身につけることによって、日本をアメリカに、アメリカを日本に紹介する能力を養うことが、何よりも望ましい」<sup>27</sup>

25. *The Friends*, November-December 1932, Celebrating 20 Years of Friend Peace Scholarships, p. 515.

26. 『同志社百年史』1026頁。

27. 『同志社百年史』1026—1027頁。

この制度は、同志社独自の構想をもってはじめられた顕著な国際交流計画であったがひきつづいて到来した経済的恐慌などにより、資金的に困難を生じ、また発足間もなくして、海老名総長の辞任（1929年）などがあり残念なことに永続きをしなかった。しかし、第1回のスチューデント・プロフェサーの働きは内外において高く評価され、それが起縁となつて前述のフレンド平和奨学金は、1928年から同志社に継続してフェローを送るようになった。フレンド平和奨学会がハワイからのフェローを送るよあたってそれまで働きがなされていた東京の諸大学が当然その対象にあげられたであろうが、敢えて京都の同志社を選んだのは、キリスト教に限ぎして、国際的な体験を積んだ新島裏の精神をうけついで内外の同志社人が数多くいたことがあげられる。さらに、当時の同志社が伝統を生かしてキリスト教の精神を振興して、スチューデント・プロフェサーにみられるような意欲的な計画を具体的に行つたいた実績が、フレンド平和奨学会のフェローを受け入れる素地になっていたことと思う。フレンド平和奨学会の機関誌 *The Friends* は1932年に二十周年記念特輯号を出し、同会の幹事であるエミリー V. ウォリナー (Emily V. Warinner) の同志社訪問記をのせ、学校の様子を詳しく紹介している。なかでも彼女が目目していることは、国際的な人材が同志社に多いということである。当時の総長は、大工原銀太郎で、J. D. ディヴィス (Jerome D Davis) や D. W. ラーネッド (Dwight Whitney Learned) のような創立当時から宣教師は去ったあとであるが、S. C. バートレット (Samuel Colcord Bartlett) 夫妻 (夫人は M. L. ゴードン Marguis Lafayette Gordon 宣教師の娘) とともに、ミセス・ゴードン (Fanny Gordon) は当時いまだ健在で京都におり、ハワイにおいても多くの人びとに知られている M. F. デントンの働き、さらに、ハワイのヌアス教会から同志社にきて同志社に一大リバイバルをおこした堀貞一のことなどに触れ、ブリンモー (Bryn Mawr) で学んだ女子部の松田道

部長、コロンビアで研鑽をつんだ日野真澄予科長、ジョンズ・ホプキンス大学で学び同志社で教鞭をとり、1928年から29年にかけてカーネギー財団の後援によってハワイ大学の客員教授をつとめた中瀬古六郎、ウィシコンシン大学で学位を得て帰国した松井七郎、シカゴ大学で学んで帰学して本部にあって総長をたすけた森川正雄などの名があげられている。<sup>28</sup> もちろん、これは筆者もことわっている様に、短期間の間に彼女の会った限られた同志社人のなかからあげられた人びとで、まだまだ外に列挙されるべき人びとがあったと思う。しかし、こうした国際的な経験の豊かな人びとが協力して、ハワイからのフェローを迎えるために尽力したことは意義のあることであると思う。

さきにものべたように昭和のはじめ堀貞一がハワイから同志社に帰って来て熱烈な宗教活動を展開した。はじめ彼は、1927年1月、同志社教会の創立五十周年記念伝道に招かれ大リバイバルをおこしたんハワイに帰ったが、同志社の切なる招きを受けて、1927年秋再来日し、同志社の宗教主任ならびに同志社教会牧師となり、1940年まで有力な働きをした。堀貞一の就任式は1927年11月13日に行われたが、それ以前より学内では賀川豊彦を迎えて伝道集会を開く計画が祈りとともに熱心になされていた。4日間にわたる賀川伝道について、当時同志社にスチューデント・プロフェサーとして赴任したばかりの大下角一はつぎのように書き誌している。

わたしは堀牧師より一ヶ月前に同志社に着いた。彼は、母校に、宗教主任として、また同志社教会の牧師として赴任することになっていた。彼が到着する前に、すでに秋の宗教週間の集会のため熱心な準備がなされていた。彼らは、かつて神戸のスラムに住み込んで働いた賀川豊彦を迎えて特別集会をなす計画をたてていた。まだ町は暗く静寂につつまれている早朝六時に、学生たちが、きびしい晩秋の寒さの中を、5人や10人ではなく数百人集

28. *The Friends*, November-December 1932, p. 518.

ってきて祈っている。昨朝は約400人の学生がいた。わたしは、いまだかつてそのような熱烈さと信仰の強さをみたことがない。彼らの祈りはきかれ、賀川は四日間、毎日四回にわたって説教をした。

そして一週間のクライマックスとして、最後の集会在やってきた。わたしは、そのとき劇的な集会をまのあたりにみた。果して、それらの会合は単なる感情的なものであるかを確かめたかったし、賀川先生に対するわたしの個人的な関心もあったのでわたしは、四日間ずっと賀川先生のとをつけるようにして集会に参加していた。それらの集会は決して感情的な一面に流れたものではなく、可成り知的な検討もなされ、レベルの高いものであった。宗教と科学、宗教と経済、宗教と生命、宗教と社会思想などの課題が論じられていた。  
(中略)

最後の集会は、日曜日の礼拝であった。そこでわたしの人生のなかで最も感動的な説教をきいた。説教者はコールテンの洋服をきて、彼の眼はスラムの生活によるトラホームで赤くはれていた。彼はベストセラーとなった『死線を越えて』で得た印税を社会事業のために捧げていた。小さなチャペルは学生たちで一杯であった。彼は、世界そして日本に対するキリストの愛について語った。しかし彼がドイツのすぐれた学者であり、音楽家であり、宣教師であるアルバート・シュヴァイツァーについて語ったとき、涙が溢れて彼の頬を伝って落ちた。彼は、しばらくの間、涙にむせんで語る事が出来なかった。学生たちもじっとしておれなかった。彼らも感動して涙を流した。わたしは、いままでに、説教をきいて泣いたことがなかったし、そのことをむしろ友人たちに自慢していた。しかし、単なる感情に動かされることの少ないわたしですら、喜びと感激の涙を禁じ得なかった。

一週間の特別集会ののち、約700人の学生

たちが、新しい生涯に入る決意を表明した。わたしは「紅海」が聞かれるのをみた。わたしは、信仰があれば「山も移る」ということを信ずるに到った。<sup>29</sup>

やや長文の引用であったが、シカゴ大学で知的な訓練をうけて、同志社にやってきたばかりの、28歳の大下角一にとっていかに強烈な体験であったかということがよく理解されると思う。大下角一は、1899年9月20日にハワイ島コハラ(Kohala)に生れ、ヒロの高等学校を卒業し、19歳のとき樋口貫から受洗した。<sup>30</sup> 樋口貫(1869—1933)は、兵庫県出石の出身で先述の通り1896年同志社神学校を卒業したのち、1906年にハワイに渡り、ハワイ島ヒロを中心に伝道牧会にあたった。彼は自らが洗礼を受けた大下角一についてつぎのように記している。

余がヒロ教会就任後、余より洗礼を領せし452名中の219人目に受洗せしは大下角一君であった。ときは大正七年(1918)6月2日であった。君が基督者として産声をあげるや、その中心は光明に輝き、アンビションに満ちた如く見えた。その後数ヶ月にして君は余に來りて曰く、「先生、私は伝道者となります」と。時に君は齡19歳の青年であった。<sup>31</sup>

大下は1919年、ハワイ大学に入学し、その間ヌアヌ教会に出席していた。ミズーリ州立大学に学び、1924年同大学を卒業し、シカゴ大学で神学を学び、M. A. の学位をうけ、さらにシカゴ神学校で研鑽をし1927年 B. D. の学位を得、その際 J. F. ニュートン・フェローシップ(Joseph Fort Newton Fellowship) を受ける榮譽に与り、自分ののぞむ外国での研鑽の機会を得、同志社にスチューデント・プロフェッサーとして1927年に着任し、1929年8月まで2年間

29. 同上, 522—523頁。

30. 『大下角一教授説教論説集』大下角一教授説教論説集刊行会, 昭和39年 310頁。

31. 樋口貫「大下角一君の番町教会牧師就任を祝して」生島吉道, 松井全共編, 『続・同志社歳時記』1977年, 27頁。

同志社で働いた。その間、1928年には、海老名弾正の次女あやと結婚し、その後シカゴ大学に戻って博士課程の研修をなし、1931学位（Ph.D）を得て日本に来て、東京の番町教会の牧会にあたった。彼は、言葉の不自由さがあり、風俗習慣のことなる日本での伝道に困難を覚え、生れ故郷であるハワイに余程帰ろうかと思ったことがしばしばであった。しかし、日本の伝道牧会に使命を覚えてふみ留った心境を1932年にハワイの友人たちにつぎのように書き送っている。

ハワイに帰りたいという願いをおしとどめることは、わたしには不可能なことです。また教会の聖なる使命に参加するものにとって時満つば、すべてのものは天にあっても地にあっても、キリストにあって一つであるということとはよくわかっているつもりですが、人間にとって耐えがたいおもいを禁じることが出来ません。しかし、キリストの御霊の導きによって、わたしは、日本において神の国のために働いているのです。考えてみれば、ハワイに生れ、その教育の大部分を米国で受けた者として、歴史的な伝統をもち、かつまた、現代的な思想の交錯する東京の教会の牧師をつとめることは、不可能に近いことです。しかし、非常な困難にも拘らず、神の恵みと力によって、わたしは、ゆるされて主に仕えているのです。

わたしは、神の聖愛による救いをもたらすために日本で働くということは、わたしをこれまで支えて下さったハワイの人々の熱意に誠実にこたえる道につながっていると思っています。このようにして、わたしは、ハワイのために働いているのだと思っています。日本におけるこの働き成功は、ハワイにおける神の働きの成功につながるものと確信しています。この信仰の下に福音を伝道し、真の救いである神の国をひろめるためにわたしは

献身したものであります。それ故に、ハワイのみなさんが、日本におけるわたしの働きのために熱心にお祈り下さるようお願い申し上げます。次第です。<sup>32</sup>

なお『基督教世界』の伝えるところによれば、賀川伝道は、1927年11月、24日から27日まで4日間に毎日四回（午前6時、午前10時、午後3時、午後7時）開かれきわめて盛会であった様子が記されている。

朝の早天聖書講演には毎会四百人余の出席者あり。大学の集会にも高等商業の集会にもチャペルは満員であったが、夜の山上の垂訓講演にはチャペルは文字通り階上迄立錫の余地なく、溢るゝ聴衆を壇の上に座せるという有様で、千名と概算されたる11月27日の早天講演は最もイムプレシヴなもので、テモテ後書に就きて堅忍不拔の信仰を論じ「醒めよ同志社」と叫ばれた時の賀川氏の面は輝いて見えた。（中略）同日の午前10時からの礼拝説教は僅か10分間で、明治40年大阪で開かれた組合教会の総会に海老名牧師のなされた「福なり」の説教と共に日本説教史上最も短くして最も深きものであった。賀川氏の10分説教の後堀牧師は起って一場の奨励を与へられた。礼拝会衆800と算せられた。<sup>33</sup>

礼拝式後、竣工された学生会館（現在の至誠館の位置にあったもの）の樓上に於て、堀貞一牧師歓迎および賀川豊彦氏への感謝をこめて午餐会が開かれ、約280名の出席者があり、速水藤助教授が堀牧師に対する歓迎を、女子部の舎監であった富森幽香女史が堀夫人に対する歓迎のことばを述べ、中島重教授が賀川氏に対する感謝の辞を述べた。その後、海老名総長が立って、岩倉の地に土地を購入し、高等商業部を移転する計画を発表すると共に、過ぐる一週間の労をねぎらい、将来にむかって教職員、学生がそれぞれ自重、協力するように要望している。

32. *The Friends*, 前出, 538頁。

33. 『基督教世界』第2292号（昭和2年12月8日）

注目すべきことは、昭和2年に堀貞一を迎え、精神的昂揚を経験すると共に、内に充実をはかり、外に国際交流の計画を推進していたことである。学問的な水準を高めることと、精神的なリバイバル（復興）をなすことは、二者択一のことではない。また、内的に充実するということと、外国との交流を深めることは、あれかこれかの選択の問題ではなく、ちょうど血液が体のすみずみにまで遠心的に働き、同時に心臓に求心的に辿ってくるように、両者、あいまって健全な働きをするものであることを示している。

ハワイ側では、フレンド平和奨学金についての委員会が設けられ、F. S. スカダー (F. S. Scudder) を委員長として、ハワイ大学長 D. L. クローフォード (D. L. Crawford), T. リチャーズ (Theodore Richards) や原田助が委員をつとめていた。原田助 (1863—1940) は同志社の社長・総長を1907年から1919年までつとめ、創立いろいろの懸案であった同志社大学を開校し、内外の充実につとめたが、1917年から18年にかけていわゆる同志社紛擾がおこり、1919年に同志社を辞し、ハワイ大学の招きによって、1920年から1932年まで12年間、ハワイに滞在して、日本学の基礎を築くとともに、日本とハワイの交流のために貢献した。就任当初、ハワイ大学で日本史および日本語をただ一人で教え、1927年からは東洋宗教史の授業を担当し、1931年からは一人の助手を得たので日本語の授業は譲り自らは日本文学、日本古典研究演習、近代日本史、東洋宗教史などを講じた。日本語の教科書を編集すると共に、東洋の比較宗教論や日本におけるキリスト教の性格やハワイにおける日本人についての論文などを英文で出版した。<sup>34</sup>

34. Tasuku Harada, *Introduction to colloquial Japanese*. With George Tadao Kunitomo. Honolulu. University of Hawaii, 1930. 105 p. Revised 2nd Edition, 1934.

Tasuku Harada, "Application of the teachings of Jesus, Buddha and Confucius to the problems of modern inter-racial and international relations." n. d.

"Japanese character and Christianity: a study

1932年病のためハワイ大学を辞任し帰国するにあたり、ハワイ大学は原田助に名誉学位 (Doctor of Laws) を贈り長年にわたる貢献にこたえた。

さて先述のフレンド平和奨学金によるハワイからのフェローは、1928 (昭和3) 年からはじめられ1939 (昭和14) 年まで12年間続けられた。この間つぎの12名が相ついで同志社に来て、諸学校で英語の授業を担当するとともに、日本の文化を学ぶようにつとめている。同志社に残っている記録と、フレンド平和奨学会側の記録をつきあわせてみると、つぎのような人びとがハワイから同志社に来て学びかつ働いたことがわかる。<sup>35</sup>

別記の表で気づくことは、滞在期間が人によってちがっており、一年の者は一人で、二年の者は三人、三年の者が四人となっており、日本の社会的、文化的状況になれて十分な研鑽をつみ、かつ働くためには可成りの歳月を要することを物語っている。なお最後の渡辺新一は、同志社に赴く予定であったが戦争の危機のため中止となりひきかえしている。

フレンド奨学金のフェローとして同志社で学びかつ働いた人びとの中に阪巻兄弟があった。とくに、阪巻駿三は、三年滞在し、同志社の英語教育に尽力するとともに、同志社の中にある ESS (English Speaking Society) の発展に貢献している。当時、同志社には、大学、高商、

of Japanese ethical ideals as compared with teachings of Christianity." *Pacific Affairs* 2: 693-698, Nov. 1929.

"National characteristics of the Japanese." 1927. IPR Paper.

"The social status of the Japanese in Hawaii; some of the problems confronting the second generation." Honolulu, 1927. 13 p.

"A study of textbooks on history and geography used in secondary schools in Japan." 1927. IPR Paper.

35. 同志社側の資料は同志社社史資料編集所の資料によった。フレンド平和奨学会の記録は、Gwenfread E. Allen, *Bridge Builders—The Story of Theodore and Mary Atherton Richards*, Hawaii Conference Foundation, 1970, pp. 155-157参照。

## フレンド平和奨学金フェロー — 農表 1928—39

氏 名	期 間	学 校
George Sakamaki 阪巻 譲治	1928年4月1日～1930年8月31日	高商, 予科大学英文
Shunzo Sakamaki 阪巻 駿三	1928年4月1日～1931年8月31日	大学英文, 予科
Kensuke Kawachi 川地 研亮	1930年9月1日～1932年8月5日	高商, 大学英文
Katsutoshi Yanaga 弥永 勝利	1931年9月1日～1933年8月31日	高商
Masaichi Goto 後藤 政一	1932年9月1日～1935年8月31日	高商
Kenji Fujiwara 藤原 謙治	1933年9月1日～1936年8月31日	高商, 中学
Isamu Sato 佐藤 勇	1934年9月1日～1937年3月31日	専門学校, 予科
Ernest Tadashi Tahara 田原 正	1936年10月1日～1937年2月4日	中学
Masao Aizawa 相沢 正雄	1937年3月1日～1939年3月31日	専門学校, 中学
Minoru Shinoda 篠田 稔	1937年9月1日～1939年8月31日	中学
George Kiyoshi Kumai 熊井 潔	1939年4月1日～1940年	
Shinichi Watanabe 渡辺 新一	1940年	(中止)

女専, 中学, 女学校などに6つの ESS があり, 阪巻駿三はその中, 大学, 高商および女専の ESS の指導をなし, 同志社の英語教育を充実させるために貢献した。彼が編集して1930年に *Japan Times* から出版された同志社の ESS の記録がある。それによると, 各地で開かれた10の英語の弁論大会に同志社から延べ24人の代表が出席し, 1等が7人, 2等が4人, 3等が3人, 4等2人, 5等4人の成績を収めている。

とりわけ注目すべきことは, 1930年3月から4月にかけて, 4人の同志社大学の ESS の学生たち(野井正澄, 中村健蔵, 橋本一雄,<sup>36</sup> 中村均)を伴ってハワイを訪問し, ハワイ大学において英語弁論大会に参加した。これにはジャッド州知事, 赤松総領事も出席してあいさつし, 約1500名の聴衆があり, きわめて盛会であった。

36. 橋本一雄(1909—1945)は当時は同志社大学経済学部学生であったが, 卒業後, 日本無線・RCAに勤務, 1945年10月19日ジャワ島ジャカルタ州ブカシ付近で戦死した。「続・同志社歳時記」169頁。

37. Shuzo Sakamaki ed., *Doshisha Oratory—1930*, 1931.

た。<sup>37</sup> 参考までは, 同志社の学生たちの演説のテーマを記しておく, 野井正澄「吾等の世界」, 中村健蔵「ハワイの人たちへ」, 橋本一夫「四海兄弟主義」, 中村均「日本と米国」。なおハワイにおける弁論交流会には阪巻兄弟の外に同志社からは大工原銀太郎総長と速水藤助教授も同行したことは, その企画に学校全体として支持をしていたがをあらわしている。<sup>38</sup>

阪巻駿三は, 弘前出身の阪巻銃三郎(1869—1940)の三男で, 1906年ハワイ島オラア(Ola-a)に生れ, ヒロ高校を卒業し, ハワイ大学に学び(B. A. 1927, M. A. 1928), 1928年から31年までフレンド平和奨学会のフェローとして同志社で教鞭をとるとともに, 日本の歴史について研修し, ハワイに帰ってホノルルの太平洋学院(Mid-Pacific Institute)で教鞭をとっていた。1932年ハワイ大学の日本研究の開拓者であった原田助が引退するに及び, 当時のハワイ大

38. *KA LLO O HAWAII*, March 28 1930 には大工原銀太郎総長, 速水藤助教授を中心に四人の学生と阪巻譲治・駿三兄弟の記念写真が掲載されている。

学の総長をつとめていた D. L. クローフォード (David L. Crawford) のすすめによって1933年コロンビア大学で日本史の領域で博士課程の研鑽をつんだ。当初の指導教授は E. B. グリーン (Evarts B. Greene) で、彼は、アメリカン・ボードから日本に赴いた最初の宣教師 D. C. グリーン (Daniel Crosby Greene) の5男であった。1936年にハワイ大学の歴史学の講師となり、1940年にコロンビア大学から学位(Ph. D.)をとり、1954年から教授として、1971年引退するまで、35年間日本史を講義するとともに、1955年から71年までハワイ大学夏期大学の部長をつとめ、全米でも屈指の夏期大学のプログラムを立案、実施した。<sup>39</sup> また1959年から毎年夏にアジア研究学会 (The Annual Summer Institute on Asian Studies) を開催するなどその功績は内外から高く評価され、今日ハワイ大学の中心部にあるサカマキ・ホールは彼を記念して建てられたものである。学問的研究においては、コロンビア大学の客員教授をしていた G. B. サンソム (George B. Sansom) の指導を受けて、「ペリー以前の日本関係」(Japan and the United States, 1790—1853; A Study of Japanese Contacts with and Conceptions of the United States and Its People Prior to the American Expedition of 1853-4, pp. 204)<sup>40</sup> について博士論文を書いた。その後は、琉球の研究をすすめる、琉球人名、地名辞典<sup>41</sup> や琉球書

誌などを出版し、琉球研究に占めるハワイ大学の地位を高くした。

阪巻駁三が1971年引退したとき、感謝記念会の司会をつとめたのが篠田稔であった。さきの一覧表にあるように、篠田稔は、1937年3月から1939年8月まで、フレンド平和奨学金フェローとして、同志社に來り、中学で教鞭をとり、当時ハワイ寮寮長代行をつとめていた上野直蔵の尽力によって京都帝国大学文学部の西田直二郎教授の下で日本思想史の研究に励んだ。彼は、同志社のフェローの任務が終っても一年間滞在をのばして日本研究に打ちこんだ。同志社におけるこの経験がのちの彼の学者としての働きに重要な基盤となった。彼は、コロンビア大学の博士課程で研鑽をつみ、1957年に学位(Ph. D.)をとり、1984年に引退するまで約28年間ハワイ大学で日本史を講ずると共に、1960年には東西研究所 (East-West Center) の創設に尽力し、ハワイ大学の高等研究センター (The Center's Institute of Advanced Project) の副所長を1966年から1969年までつとめるなど、大学全体の進展に貢献した。研究においては、日本の中世史の研究を専門とし、吾妻鏡の研究に力を注ぎ、それを英訳し、鎌倉幕府成立基盤について業績を残している。<sup>42</sup>

このように原田助によってはじめられたハワイ大学の日本研究は、阪巻駁三にうけつがれ、それをひきついで篠田稔が尽力し、さらに東洋図書館長を松井正人がつとめるなど、同志社で学んだひとびとの有力な働きによって進展していることは、決して偶然なことではないように思う。

39. 1955年夏期大学が開かれたときは161のクラスに4,214人の学生が参加したが、1970年には、1,000のクラスに16,986人の学生が参加するほど盛況を呈するようになった。 *The Sunday Star-Bulletin & Advertiser*, Honolulu, October 17, 1971.

40. Shunzo Sakamaki, *Japan and The United States, 1790-1853*, The Asiatic Society of Japan, 1939.

41. Shunzo Sakamaki, *Ryukyuan Names: Monographs on and List of Personal and Place Names in The Kyukyus*, East-West Center Press, 1964, pp. 206. (『琉球人名、地名辞典』, 東京大学出版会, 1964) および Shunzo Sakamaki, *Ryukyu: A Bibliographical Guide To Okinawan Studies, Surveying Important Primary Sources and Writings in Ryukyuan, Japanese, Chinese, and Korean*, University of Hawaii Press

1963 pp. 353.

42. Minoru Shinoda, *The Founding of the Kamakura Shogunate 1181-1185 With Selected Translations from the Azuma Kagami*, Columbia University Press, 1960.